



5 礎石建物と長福寺学寮

昭和 18 年に愛児園の園舎を新築するために長福寺学寮は解体されましたが、この長福寺学寮と伝えられている建物写真(写真②と③)が残っています。2つの写真の建物は、梁行き2間、桁行き3間の土蔵造りの建築物とみられ、南側と東側に窓があったことがわかります。

こうした古写真を参考にすれば、今回の礎石建物Bが長福寺学寮跡の可能性が高いと考えられます。



付 長福寺学寮等略年表

- 寛永 14 年(1637) 長福寺が豆田町に移転する。
- 宝暦 09 年(1759) 長福寺学寮が草野家の寄進によって建てられる。
- 寛政 01 年(1789) 廣瀬淡窓が長福寺法幢上人に「詩経」の句読を受ける。
- 文化 02 年(1805) 廣瀬淡窓が長福寺学寮を借りて講義を始める。
- 明治～昭和 17 年 長福寺学寮の写真が撮影される。(写真②と③)
- 昭和 18 年(1943) 長福寺学寮を解体して日田愛児園を新築する。
- 昭和 30 年(1955) 日田愛児園を増築する。
- 昭和 31 年(1956) 月隈幼稚園と改称する。
- 平成 22 年(2010) 月隈こども園と改称する。



写真② 長福寺学寮古写真「咸宜園写真帖」昭和 11 年発行



写真③ 長福寺学寮古写真「咸宜園教育発達史」昭和 43 年発行



文化財の保護

国の伝統的建造物群保存地区に選定されています豆田町には、伝統的な建築物の以外にも、建築物を支えた建物礎石などの地下遺構が残っています。こうした地下遺構群は、城下町遺跡として保存されており、豆田町の歴史を語る上で欠かすことのできない遺跡でもあります。遺跡や史跡の保護に、皆様のご協力をお願いします。

日田市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係 (Tel. 0973-24-7171)

城下町遺跡 3 次(長福寺学寮跡)

発掘調査現地説明会資料

2012 年 11 月 4 日(日)
日田市教育委員会



1 はじめに

長福寺は、日田市豆田町上町通りにある真宗大谷派寺院で、照雲山の寺号をもち、天正 12 年(1584)の開創と伝えられています。当初は筑前国下座郡美奈木(現在の福岡県朝倉市)にありましたが、豆田町南の中城村に移り、寛永 14 年(1637)に現在地に移転しています。

こうした歴史ある長福寺にあって、寛文 9 年(1669)建立の本堂は、京都西本願寺旧本堂の西山別院と類似する建築様式であることから、九州では最も古い江戸時代初期の真宗寺院本堂様式を持つ建築物として、平成 18 年 7 月 5 日に国の重要文化財の指定を受けています。

このほか、境内には山門、常燈明堂、経蔵、鐘楼、庫裏、土蔵などの伝統的建築物が現存しており、庫裏の北側の庭池は水路の水を引いて築庭された「流れの庭」として知られているなど、豆田町唯一の寺院として現在にいたっています。



2 長福寺学寮

寛文 5 年(1665)に真宗大谷派では宗学研究機関として東本願寺別邸に学寮を創建し、宝暦 5 年(1755)には高倉通り魚棚に移転して高倉学寮と呼ぶようになります。

長福寺 10 世通元の宝暦 9 年(1759)には、掛屋・升屋(草野家)の寄進によって「長福寺学寮」が創建されます。修行僧のために仏典や詩文を講義する場であった学寮は、「楽法楼(ぎょうほうろう)」とも呼ばれ、以後、11 世普明(宝月)、12 世法幢に引き継がれ、多くの学僧が研學に専念しました。



3 淡窓と長福寺学寮

廣瀬淡窓は、24 歳の時の文化 2 年(1805)3 月 26 日に長福寺学寮を借り受けて、教育者としての道を進むこととなります。淡窓の「懐旧楼筆記」には、次のような記事がみられます。

「楼あり。楼上楼下、合せて席 20 畳ほどあり。3 人にて飯を炊きたり。」

この記録から長福寺学寮は 2 階建ての建物で、1・2 階合わせて 20 畳ほどの広さであったことがわかります。梁行き 2 間、桁行き 3 間ほどの建物であったようです。3 人とは、淡窓と門下生の諫山安民、館林伊織のことで、学寮生活で飲食を共にしています。

ところが、長福寺の学僧が増えたので淡窓の学寮時代は 100 日程度で終わってしまい、廣瀬家に戻って南家土蔵で講義をすることになります。



4

発掘された建築遺構

今回の発掘調査は、豆田町伝統的建造物群保存事業の一環として長福寺の旧日田愛児園園舎の改修に伴って、10月5日から実施したものです。調査では、園舎建築以前にあたる昭和初期の建物遺構や通路などのほかに、礎石建物1棟を確認しています。

礎石建物は、図1のとおり、礎石8個が検出されています。礎石1と4は、隅の丸い長方形をした他の礎石とは異なり、隅が丸い三角形をした礎石です。とくに礎石1には、土台の痕跡が認められ、この礎石が南東隅に据えられていたものであることがわかります。

礎石2は、表面が赤く火熱を受けており、一部加工した痕跡がみられることから、再利用された石と推定されます。礎石5と6には墨線の跡が残っており、礎石8には切石が載せられています。

こうした礎石1～4と礎石7・8から、梁行き2間(約4m)、桁行き4間(約8m)の礎石建物Aが考えられます。また、礎石6が存在することから、梁行き2間(約4m)、桁行き3間(約6m)の礎石建物Bも想定されます。

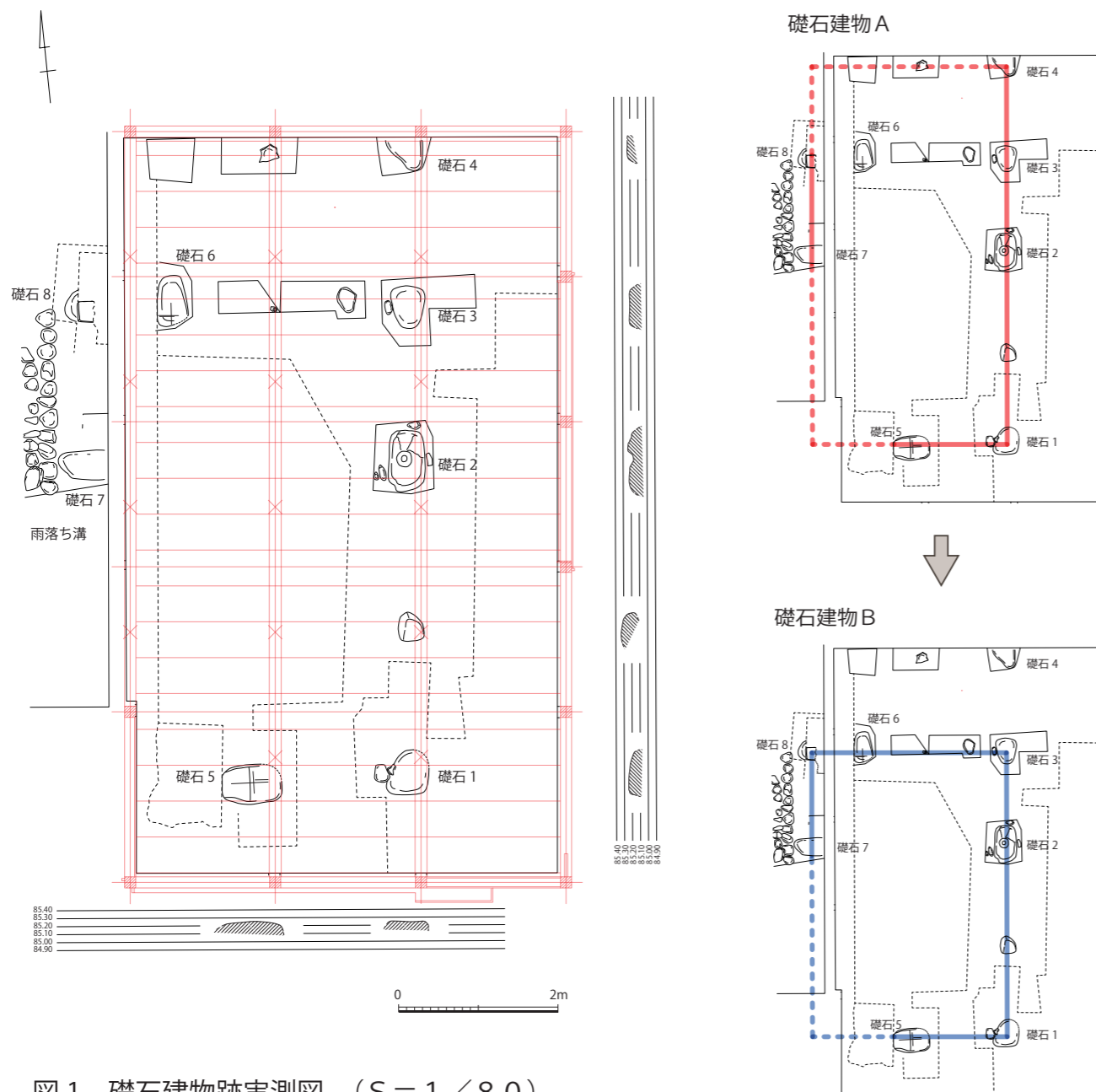
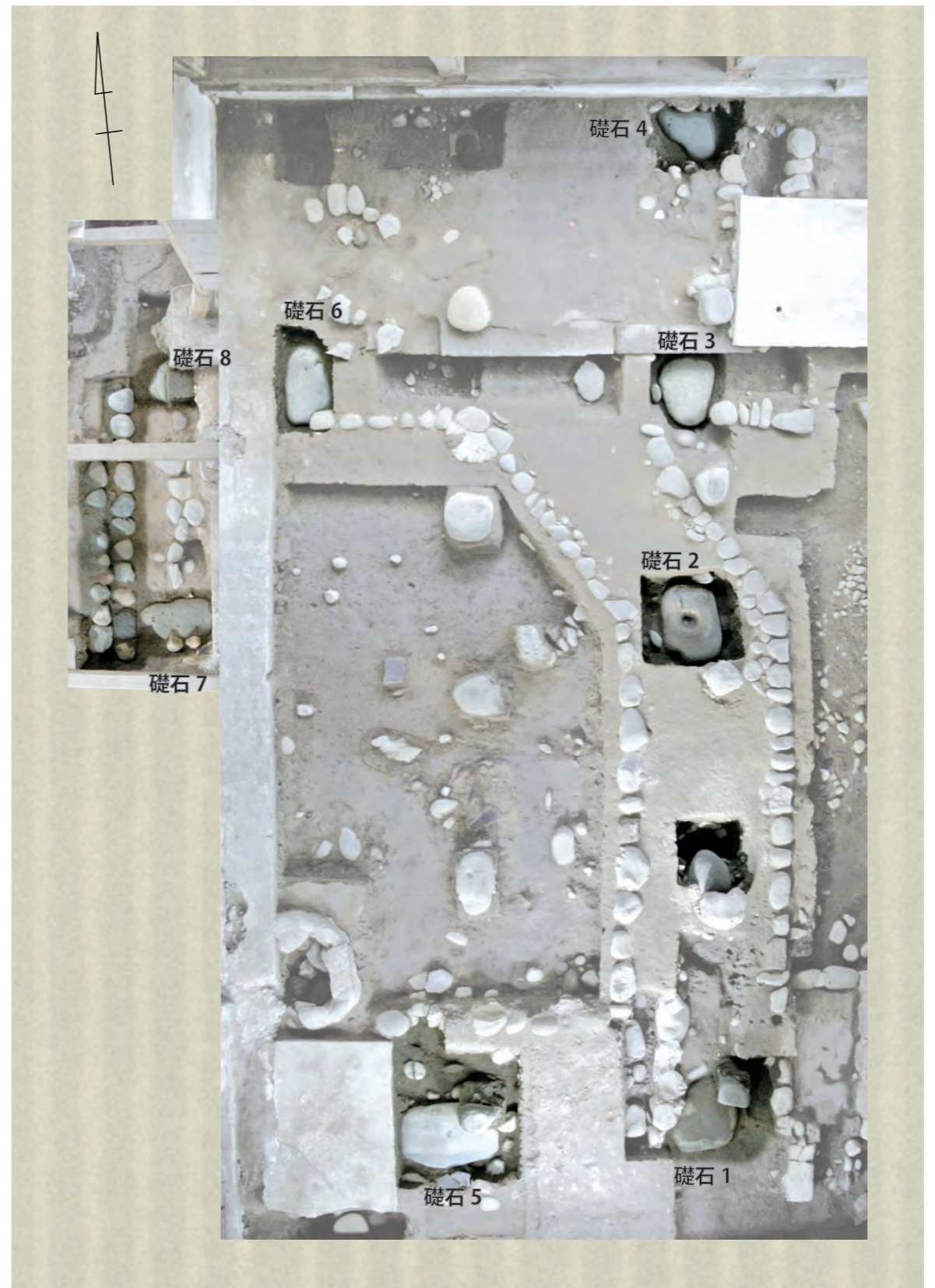


図1 礎石建物跡実測図 (S=1/80)



写真① 礎石建物跡垂直写真(合成写真、一部補正有り)